

称号及び氏名	博士(学術) 中西 久実子
学位授与の日付	平成20年3月31日
論文名	現代日本語におけるとりたて助詞の使用実態と 日本語学習者の習得
論文審査委員	主査 野田 尚史 副査 山田 實 副査 張 麟声

## 論文要旨

本研究は、現代日本語のとりたて助詞「だけ」「しか」「ばかり」「こそ」「さえ」「まで」「でも」「など」「なんか」「なんて」「くらい」「も」「なら」を対象とし、書きことば・話しことばの言語データをもとに、日本語学習者のとりたて助詞の使用実態と習得を明らかにした研究である。本研究では、学習者によるとりたて助詞の使用と習得の実態を網羅的に記述しただけでなく、学習者の使用・誤用の問題点を指摘し、学習者が習得しやすいとりたて助詞と、習得しにくいとりたて助詞の特徴を実証的に論じている。とりたて助詞は、先行研究では日本語母語話者の視点から分析されることがほとんどであった。そのため、学習者によるとりたて助詞の使用実態と習得を実証的に解き明かすことには十分な意義があると考えられる。

本研究による最大の成果は、述語の位置の「だけだ」で誤用・不使用が多いという問題を調査によってみだし、それが、述語の位置の「だけだ」が述語以外の位置の「だけ」とは異なる用法であることに起因するという点を論証した点にある。そして、さらに、「だけだ」は述語を名詞化する機能があるということを示すことに成功した。このことから、学習者が習得しやすいのは、とりたて助詞が名詞に直接接続する場合であり、述語を名詞化してとりたてた特別な用法の「だけだ」は習得しにくいということを示した。

本研究のおもな構成は下のようになる。第1部が序論、第2部と第3部が本論で、第4部が結論である。

第1部(第1章から第3章):本研究の枠組み

第2部(第4章から第16章):学習者・母語話者によるとりたて助詞の使用実態

第3部(第17章から第22章):学習者によるとりたて助詞の誤用・不使用

第4部(第23章から第27章):学習者によるとりたて助詞の習得

以下、各章で述べたことをまとめる。

第1章では、本研究の対象を示した。

第2章では、とりたて助詞の使用・誤用の実態を、使用・誤用の頻度という客観的な指標で数値

化するという方法論を示した。また、本研究では、初級・中級レベルの日本語教科書におけるとりたて助詞の使用実態も明らかにすることについても述べた。

第3章では、第1章、第2章で述べたことをまとめた。

第4章では、とりたて助詞の使用実態の調査の結果を概観し、誤用の頻度が高い用法は、述語の位置の「だけだ」「数量語＋だけ」などであることを示した。さらに、教科書では、とりたて助詞が形式ごとにインプットされるという形式至上主義が残っており、まだ、インプットされていない用法のとりたて助詞が暗示的に教科書に出現するという問題があることを指摘した。

続く第5章から第15章では、とりたて助詞の使用実態の調査の結果を形式ごとに考察した。

第5章では、学習者・母語話者による「だけ」の使用実態を示した。学習者は、述語の位置の「名詞＋だけだ」で誤用をおかしやすく、述語の位置の「動詞＋だけだ」については不使用の問題がある。

第6章では、学習者・母語話者による「しか」の使用実態を示した。母語話者は述語の位置の「動詞＋しかない」「名詞＋でしかない」を多用するが、学習者は使用しないという問題がある。述語の位置の「しかない」「でしかない」には「ない」という否定が含まれるが、意味的には「がある」という肯定の意味になるため、学習者は習得しにくいのである。

第7章では、学習者・母語話者による「ばかり」の使用実態を示した。述語の位置の「動詞＋ばかりだ」について、不使用の問題が認められた。

第8章では、学習者・母語話者による「こそ」の使用実態を示した。学習者は、「こそ」をほとんど使用しないという問題がある。「こそ」の使用の頻度が低いことについては、教科書からのインプットがほとんどないということと相関性があるということを指摘した。

第9章では、学習者・母語話者による「さえ」の使用実態を示した。学習者は、母語話者が多用するような「動詞(マス形)＋さえ～ば」「でさえ」について不使用の問題がある。

第10章では、学習者・母語話者による「まで」の使用実態を示した。学習者は、「まで」をほとんど使用しない。

第11章では、学習者・母語話者による「でも」の使用実態を示した。学習者は、全部肯定の「疑問語＋も」にすべき「疑問語＋でも」、および、累加を表す「も」にすべき「でも」の誤用が多い。

第12章では、学習者・母語話者による「など」「なんか」「なんて」の使用実態を示した。母語話者は、「などとは」「などと言う」など引用の「と」節を含むとりたてとして「なんて」を多用するが、学習者はこのような「なんて」を使用しないという問題がある。

第13章では、学習者・母語話者による「くらい」の使用実態を示した。学習者は、「くらい」をほとんど使用しない。

第14章では、学習者・母語話者による「も」の使用実態を示した。累加を表す「も」は、初級レベルの教科書で集中的にインプットされるため、学習者には過剰使用の傾向がみられるという相関性が認められた。これに対して、極限を表す「も」については、ほとんどインプットがなく、学習者には不使用の問題がある。

第15章では、学習者・母語話者による「なら」の使用実態を示した。学習者は、主題をとりたてる「なら」を「は」の代わりに使用して誤用となることが多い。

第16章では、学習者・母語話者によるとりたて助詞の使用実態についてまとめた。第4章から第15章までの考察で、次の2つの問題が抽出された。第1の問題は、述語の位置の「名詞＋だけだ」、「数量語＋だけ」などで誤用の頻度が高いということである。第2の問題点は、述語の位置の

「動詞＋だけだ」などについて不使用の問題があることである。そこで、次の第17章から第22章まででは、これらにとりたて助詞の誤用・不使用の問題をとりあげて論じることにした。

第17章では、述語の位置の「だけだ」の誤用の原因を解明した。学習者は、述語の位置の「名詞＋だけだ」で誤用をおかしやすい。この誤用は、性質を叙述する用法の名詞述語には直接「だけだ」が接続できないことに起因する。また、この章では、述語の位置の「イ形容詞＋しかない」が使えないという現象を指摘した。このため、述語の位置の「だけだ」は、「しか～ない」が表すのと同じような否定的な含意をもち、「しかない」の代用となっているのである。

第18章では、誤用の頻度がもっとも高い「数量語＋だけ」について追加調査をおこない、次のような結果を得たことを示した。

- 1) 学習者は「概数に「だけ」を付けてもよい」と認識している。
- 2) 学習者は数量語に「だけ」を付けるのは失礼でないと認識している。
- 3) 日本語能力の低い学習者は性質を叙述する述語に「だけ」を付けても正しいと思っている。

第19章では、「疑問語＋「も」「でも」」の誤用は、肯定文で起こりやすいということを指摘した。

第20章では、学習者は、引用の「と」節をとりたてる「しか」「ばかり」などを使用しないということを指摘した。

第21章では、代表例を表す主題のとりたての「など」「なんか」は、学習者の不使用の対象になりやすいということを指摘した。

第22章では、学習者による誤用・不使用の問題についての考察をまとめた。第17章から第21章までの考察では、述語の位置の「だけだ」など、特別な用法の場合に誤用・不使用の問題を起しやすいう傾向がうかがえた。

次の第23章から第26章まででは、本研究の結論を示した。

第23章では、とりたて助詞は名詞や用言の語幹など素材レベルの要素をとりたてられるが、学習者が習得しやすいのは、名詞をとりたてる用法であることを指摘した。

第24章では、学習者は文の成分の中でも、ヲ格やガ格の格成分のとりたてを習得しやすいことを示した。名詞に直接とりたて助詞をつければよいから習得しやすいのである。

第25章では、述語の位置の「だけだ」などは、述語を名詞化してとりたてる特別な用法であることを示し、学習者は、この用法を習得しにくいことを指摘した。

第26章では、とりたて助詞「など」「なんか」「でも」は、主題を名詞化してとりたてる特別な用法であることを示し、学習者はこの用法を習得しにくいことを指摘した。

最後の第27章では、「学習者によるとりたて助詞の習得」で述べたことをまとめた。母語話者は、素材レベルの要素、格成分や述語などの文の成分、主題など、さまざまな要素をとりたてる。これに対して、学習者がとりたてるのは、素材レベルの名詞だけである。学習者は、名詞がとりたてられる用法を習得しやすく、逆に、述語の位置の「だけだ」や主題のとりたてなど特別なとりたての場合には誤用や不使用の問題が生じている。

## 学位論文審査結果の要旨

この論文に対する学位論文審査委員会の審査結果の要旨は、次のとおりである。

### 1. この論文の意義

この論文は、現代日本語のとりたて助詞「だけ、しか、ばかり、こそ、さえ、まで、でも、など、なんか、なんて、くらい、も、なら」を日本語母語話者と日本語学習者がそれぞれどのように使用しているかを書きことばと話しことばの多くのデータをもとにして解明したものである。とりたて助詞の意味・用法や文法的性質の研究は近年、急速に進んできているが、日本語学習者を含めてその使用実態を本格的に追究した研究はほとんどなく、その点に大きな意義がある。

### 2. この論文の総合評価

日本語母語話者と日本語学習者のとりたて助詞の使用実態を多くのデータから実証的に比較し、日本語学習者がどのような場合にとりたて助詞を誤って使ったり、使うべきときに使わなかったりするのかという実態を詳しく考察した点が高く評価できる。従来の研究とは違う新しい点として、特に次のようなことが指摘できる。

- (1) すべてのとりたて助詞について日本語学習者の使用実態を詳細に調査している。
- (2) 書きことばと話しことばの膨大なデータに基づき、数量的な分析を行っている。
- (3) 日本語学習者のとりたて助詞の「誤用」だけでなく、とりたて助詞を使うべきときに使わない「不使用」の問題を積極的に取り上げている。
- (4) 日本語学習者にはどのようなとりたて助詞の用法が習得しやすく、どのようなとりたて助詞の用法が習得しにくいかを明らかにし、その違いを考察している。
- (5) 日本語教科書からのインプットの影響など、日本語学習者のとりたて助詞の誤用や不使用の原因を追究している。

### 3. この論文の評価の詳細

#### 3.1 第1部「本研究の枠組み」に対する評価

第1部では本研究の枠組みについて述べられている。日本語学習者の書きことばと話しことばの大量のデータを客観的に分析する実証的な方法論や、とりたて助詞の「誤用」だけでなく、とりたて助詞を使うべきときに使わない「不使用」も取り上げる問題意識の深さ、日本語教科書からのインプットの影響などを考慮する視野の広さは、これまでの研究ではあまり見られなかったことであり、高く評価できる。

#### 3.2 第2部「学習者・母語話者によるとりたて助詞の使用実態」に対する評価

第2部では、日本語母語話者と比較しながら日本語学習者によるとりたて助詞の使用実態を明らかにしている。大量のデータを分析した結果として、誤用の頻度が高い用法は述語の位置の「だけだ」や「数量語+だけ」などであることや、日本語母語話者が多用する「動詞+だけだ」や「動詞+しかない」、「名詞+でしかない」、「動詞(マス形)+さえ〜ば」、「でさえ」、引用の「と」節

を含むとりたてとしての「なんて」などを日本語学習者はほとんど使用していないことを指摘している。また、累加を表す「も」や主題をとりたてる「なら」の過剰使用の問題も指摘している。このような指摘は大量のデータを詳細に分析しなければできないことであり、大きな価値がある。

### 3.3 第3部「学習者によるとりたて助詞の誤用・不使用」に対する評価

第3部では、日本語学習者によるとりたて助詞の誤用・不使用がどのようなメカニズムで起きるのかが検討されている。たとえば、日本語学習者は、述語の位置の「名詞＋だけだ」で誤用をおかしやすいが、これは性質を叙述する用法の名詞述語には直接「だけだ」が接続できないという日本語の性質に起因するとしている。また、誤用の頻度が最も高い「数量語＋だけ」については、学習者は概数に「だけ」を付けてもよいと認識していることや、日本語能力の低い学習者は性質を叙述する述語に「だけ」を付けても正しいと思っていることなどを追加調査によって明らかにしており、高く評価できる。また、述語の位置では「イ形容詞＋しかない」が使えないため「だけだ」が「しかない」の代用になっていることなど、日本語文法の新しい知見も得ている。

### 3.4 第4部「学習者によるとりたて助詞の習得」に対する評価

第4部では、この論文の結論として日本語学習者によるとりたて助詞の習得についてまとめている。学習者が習得しやすいのは名詞をとりたてる用法であることや、学習者が習得しにくいのは「だけだ」など、述語を名詞化してとりたてる特別な用法であることなど、大局的な見地から問題を整理しており、有意義である。

## 4. 今後の課題

この論文では日本語学習者の書きことばと話しことばのデータを大量に分析し、とりたて助詞の誤用や不使用などの実態を詳細に解明しているが、個々の学習者がどのような過程を経てとりたて助詞を習得していくのか、また、学習の各段階でそれぞれのとりたて助詞をどう捉え、どのような意識で使用しているのかまでは明らかにされていない。また、学習者の母語による習得の違いも、深くは追究されていない。

今後、そのような研究を進め、大きな成果が得られれば、申請者はとりたて助詞の習得研究の第一人者としてだれからも認められるようになるだろう。今後の発展が大いに期待される。

## 5. この論文の外部評価

この論文に直接関連する内容の研究は、日本語の文法研究の最前線で活躍する研究者の最新の論文が集められた論文集(全3巻)に次の論文が掲載されている。

中西久実子「「だれも」は肯定述語と結びつかないのか——「だれも等しく教育を受ける権利を有している——」、益岡隆志・野田尚史・森山卓郎(編)『日本語文法の新地平2』pp.27-39, くろしお出版, 2006.

また、国際シンポジウムやワークショップを頻繁に開催し、多くの出版物を出している香港日本語教育研究会の機関誌の最新号に唯一の「論文」(academic paper)として次の論文が採用され、掲載されている。(他はすべて「研究ノート」(working paper)などである。)

中西久実子「日本語学習者のとりたて助詞「でも」の不使用の実態——主題をとりたてる例示の「でも」——」『日本學刊』11, pp.5-20, 香港日本語教育研究会, 2007.

さらに, 次のような科学研究費補助金を研究代表者として獲得している。

日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C)(1)「主題・とりたてに関する非母語話者と母語話者の運用能力の対照研究」(平成 15 年度～平成 18 年度)

そのほか, この論文とは異なるテーマの研究で, 日本語教育分野では世界で最も権威のある日本語教育学会の『日本語教育』や, それに次ぐと言われる国際交流基金日本語国際センターの『日本語教育論集 世界の日本語教育』にも論文が採用され, 掲載されている。

これらは申請者の研究内容が学界から十分な評価を受けていることを示している。

## 6. 審査委員会の結論

本審査委員会は, 全員一致で, 申請者に対して博士(学術)の学位を授与されることが適当であるとの結論に達した。